教育実践力向上を目指した大学院生による教育プログラム

― 学部生を対象とした企画・運営を通して ―

竹井智彦（教育実践コース２年）　佐藤一輝（教育実践コース２年）
並松紀一（教育実践コース２年）　山崎暁帆（教育実践コース２年）
宮田郁矢子（教育実践コース２年）　森田隆行（新潟大学大学院教育実践学研究科）
坂井　純（新潟大学教育学部／新潟大学教職支援センター）

１　はじめに

新潟大学大学院教育実践学研究科（以下，教職大学院）では，ストレートマスター（以下，学卒院生）の教育現場における実践力向上をねらった教育プログラムを大学教員が作成し，参加を希望する学卒院生を対象に非公式に実施してきた。この教育プログラムは教職大学院が開設された平成28 年度より実施されており，令和３年度からは，教員採用試験に合格する意味の「Pass」，実践力を磨くという意味の「Polish」のそれぞれ頭文字にちなみ，「P 研」と称されるようになった（本稿では，以降この教育プログラムをＰ研と記載する）。なお，P 研の主目的は「Polish」である。「Pass」はそのプロセスにある達成課題である。

P 研の計画は，大学教員のうち義務教育諸学校での勤務経験を有する実務家が主になって作成しており，教育現場が求める人材に必要な資質・能力を伸長させるという観点から各回の内容が工夫されてきた。そのためもあり，例年，P 研に参加した学卒院生から，学んだ内容の有用性に関する感想が多数寄せられる。「とても役に立った」「P 研のおかげで合格できた」「願書の記述が合否に影響するとは思わなかった。学べて助かった」「授業では学べないことを学べた」「繰り返しの模擬授業により実践スキルが高まった」などの感想である。院生の教員採用試験合格，実践力向上のそれぞれに与えた影響に関する客観的な証拠はないものの，上述の感想からねらいの達成に一定の成果があったものと思われる。

一方，P 研に関する課題もあった。ひとつは，学卒院生の自ら学ぶ姿勢をさらに高めるための方策を模索することである。P 研への学卒院生の参加者数は，例年，教員採用試験終了後の９月から極端に減少する傾向があり，指導に当たる大学教員の数が参加する学卒院生の数を上回る時がしばしばあった。参加・不参加を自身のニーズや都合に合わせて決定する学卒院生の姿ではあるが，大学教員が用意するサービスを受けるかどうかということであるため，学卒院生が自ら学んでいる態度とは言い難い。とりわけ修了後に義務教育諸学校でアクティブ・ラーニング（受け身でない学び）を指導することになる学卒院生にとって，望ましい態度とは言えない。大学教員が計画を作成し，参加する学卒院生を募るというＰ研のあり方に変更が必要だった。

もうひとつは，新潟大学全学を対象にＰ研の提供を広げていくことであった。P 研は学部生の実践力の育成にも結びつくことから，新潟大学教育学部（教職大学院と同一の建物に設置されている。以下，学部）と連携したあり方が以前より検討されていた。また，新潟大学教育・学生支援機構の教職支援センターと連携し，他学部や他研究科に在籍する学生で義務教育諸学校教員を志望する者に対してもＰ研を提供することが話題になっていた。加えて，令和３年度からは，教育学部教職サポートルームで実施する「せんせいの広場」のチューターとして学卒院生が関わるなどの取組も始まっており，これに合わせてＰ研のあり方を変更していく必要があった。

以上より，令和４年度では，P 研を大学教員ではなく，大学教員の指導のもとで学卒院生自身が企画・運営するあり方へと変更することにした。また，学部や教職支援センターと連携し学部生を対象に加えることにした。加えて，全学に広報し，他学部や他研究科の学生の参加も可能とすることにした。

２　活動の計画

⑴　名称

令和４年度Ｐ研（教員としての実践力育成研修）

⑵　目的

・　「Pass」（教員採用検査に合格する）
・　「Polish」（実践力を向上させる）

⑶　方法

① 対象者
・ 学卒院生で参加を希望する者
・ 学部生３・４年で参加を希望する者
・ 他学部や他研究科に在籍する学生で参加を希望する者
② 時期，時間(回数)
令和４年４月から令和４年12月 原則隔週月曜日２限 10:15〜11:45（18回）
③ 場所
学部B棟105室（必要に応じ場所を変え実施する）
④ 運営メンバーの組織と分担
・ P（プロジェクト）長：学卒院生２年
・ 副P長：学卒院生２年
・ 広報担当（学部生宛チラシ作成，写真記録，報告）：学卒院生２年
・ 庶務担当（問い合わせ窓口，名簿作成，連絡）：学卒院生２年
・ 各回担当（司会進行，会場設営等）：学卒院生２年輪番
⑤ 担当教員
教職大学院の教員１名，教育学部／教職支援センターの教員１名（計２名）
⑥ 目標の確認，全体像に関する検討，企画，内容の決定，対象者への周知，特に必要が生じた場合の手続き
運営メンバーと担当教員で目標を確認し，活動の全体像に関する検討を行なった。この検討結果に基づき，運営メンバーが18回の内容を企画し，各回のテーマに対応可能な大学教員に連絡した。内容の具体は各回に対応する大学教員と相談しながら決定した。決定した内容は，メッセージアプリ（SLACK）と「せんせいの広場」で活用する掲示板の両方を用いて，対象者に知らせた。
また，その他，特に必要が生じた場合の手続きについては，次のとおりとした。担当が活動計画案を作成→運営メンバー全員で案を検討→P 長（副P長）から担当教員に案を提示→担当教員が承認→P 長（副P長）が担当に計画を提示→計画に従い活動を実行
⑷ 活動の内容
① P研の広報，周知
② 各回の実施
・ 教員採用検査に合格するための効果的な知識・技術・態度の習得に関する，招待講師による研修の実施
・ 実践力を向上させるための次の研修の実施：参加者相互によるミニ授業検討会，学級経営，生徒指導，特別支援教育に関する実践的手法の研修，参加者のニーズに基づく研修
・ 親睦，情報交換
③ 受講者によるP研の評価

３ 活動の実際

⑴ P研の全学への広報，周知
４月に対象者に対してP研を開催する旨を文書の添付により周知した。また対象者向けの説明会を開催した。説明会への参加者は，学部生が15名，学卒院生が10名であった。P研に参加を表明して参加者名簿に登録された者は，最終的に27名（学部生16名，学卒院生11名）となった。この27名のうち，他学部在籍者は０名，他研究科在籍者１名であった。
また，ソーシャルネットワーキングサービス『Twitter』に公式アカウント「新潟大学教職大学院P研【公式】」を開設し，各回終了後，参加者数，実施の概要，感想等を投稿した。同じ内容を，教職大学院のSLACKの教員と院生が使用するチャンネルにも投稿した。
⑵ 実施概要
18回を実施した（表１）。
主に教員採用検査合格に向けた回は 11 コマ行なった。内容は，「願書の書き方」，「指導案作成のポイント」，「面接と場面指導について」をそれぞれテーマとした講義，指導案検討や模擬授業，面接練習や場面指導練習などの演習であった（ここでの模擬授業とは，教員としての資質を面接官にアピールするために行う 10〜15 分程度の短時間での授業のロールプレイを指す。また，場面指導とは，学校で生じた問題に対応できるか人物かどうかを評価するために行われるもので，面接官から事例の提示とともに「あなたなら，このような場面にどう対応しますか」などの質問が与えられるものを指す)。
主に実践力を向上させるための回は５コマ行った。内容は，「学校現場に出るまでに準備すること」，「学級開きの仕方，学級目標の作り方」，「授業の技術」，「UDLの授業づくり」，「授業におけるICT」をテーマにした講義であった。
主に親睦や情報交換を図る回は２コマ行った。内容は，実務家の大学教員による講話と「自己紹介」，「大学教員からの激励」であった。なお，親睦や情報交換は，この２コマに限らず，全ての回においてインフォーマルに行われていた。
講師として各回を担当した大学教員は延べ 48 名，講師としてではなく各回に参加し，参加者を

指導した大学教員は延べ55名であった。

18 回全てへの対象者の参加数は，延べ 301 名（学部生175名，学卒院生126名）であった。1回の参加者数の平均と標準偏差はそれぞれ，16.7（学部生 9.7，学卒院生 7.0），3.8（学部生 3.2，学卒院生3.1 ）であった。

また，各回を，教員採用検査合格に向けた回（11回），実践力を向上させるための回（５回），親睦や情報交換を図る回（２回）の３カテゴリに分けて，それぞれの参加者数の平均（標準偏差）を算出したところ，順番に 17.8（3.6），14.0（1.3），17.5（5.5）となった。

⑶　受講者によるＰ研の評価

オンラインのアンケートフォーム『Google Forms』を用い，教員採用試験が終了した後の９月に記名式で行なった。名簿登録者 27 名のうち 13 名から回答を得た（回答率51.8%）。

質問は，Ｐ研への出席率，Ｐ研の存在を知った理由，Ｐ研全体の満足度とその理由，Ｐ研の各回の満足度，Ｐ 研の参加を後輩に薦めるか，感想の６つの内容で構成した。

Ｐ研全体の満足度を問う質問項目は，「Ｐ研について総合的に満足していますか」に対して，「とても満足」⑴から「とても不満足」⑸までの５段階から選択して回答させるものであった。回答は，13名中，「とても満足」⑴が９名，⑵が１名，⑶が０名，⑷が２名，「とても不満足」⑸が１名という結果であった。「とても満足」⑴と回答した理由には，「場面指導や模擬授業の指導が，本番の面接に生きたからです。教員になってからも必要な力が少しでも身についたとおもいます」「先生方のご指導が大変参考になりました」「なかなか対策の情報が少なかったり，練習の機会を自分で見つけていかなくては行けない中，志の高い仲間と頑張ることができて，毎回多くの刺激を受けることができたからです」「先生や大学院生の先輩方が相談や練習に沢山関わって頂いたから」「教職大学院の先輩方や先生と一緒に学ぶことができ，とても勉強になったからです。また，教員採用試験二次対策もとても充実していてとても満足しています」「参加学生や先生方に良くしていただき，模擬授業や教採の対策を行うことができたため」の記述があった。⑷と回答した理由には，「指導案の指導が教員からあると良かった」との記述があった。「とても不満足」⑸と回答した者の記述は，「本番の面接に生きたから，志の高い仲間と共に頑張ることができたから，先生や院生が相談や練習に関わってくれたから」であった（肯定的な評価であるため，おそらく５段階の選択を誤ったものと考えられる）。

Ｐ 研の参加を後輩に薦めるかどうかを問う質問項目は，「すごくおすすめしたい」⑴から「全くおすすめできない」⑸までの５段階から選択させるものであった。回答は13名中，「すごくおすすめしたい」⑴が９名，⑵が４名であった。

感想は自由に記述するよう求めたものであった。得られた記述を次に示す。「教採に向けて意識の高い人や教採経験者の方とつながれる場として，とても助かりました。情報交換ができて刺激になりました」「コロナ渦ということで初めてあった先生や友達，先輩が多かったがみんな優しく接して下さり，教採のモチベーションが上がると共に教育の価値観が広がりました」「講義だけでなく，実践の時間が多く大学の講義ではなかなか身につけられなかったことがＰ研を通して身につけることができたと感じている」「初めはとても緊張しましたが，教職大学院の先輩方と意見交換しながら学んだり，教職大学院の先生方からご指導をしていただくことができて，とても勉強になりました」「大学２年生から対面の授業がほとんどなく，試験の準備について不安なことがたくさんありましたが，Ｐ 研の先輩方や先生方のおかげで不安をなくすことができました。また，試験のためだけでなく現場に出てからも大切なことを学ことができました。これから学校現場で働きますが，Ｐ 研で学んだことを活かして頑張っていきたいと思います」「授業と被ってしまい，なかなか参加は難しかったですが，運営の方がしっかりと対応して下さり，その後参加しやすかったです。第一回の顔合わせの雰囲気が和やかで素敵でした！」「他学科の人とも交流できたので良かったです」

３　おわりに

Ｐ 研の課題は，学卒院生の自ら学ぶ姿勢をさらに高める方策を模索すること，新潟大学全学を対象に提供を広げることの２つであった。そのため，学部ならびに教職支援センターと連携しながら，対象者の範囲を広げ，学卒院生２年が企画・運営するＰ研へとそのあり方を変更した。教育学部・教職大学院・附属学校園の三者共同研究のひとつである教育学部第１回 FD（令和４年 10 月）においては，進行中のＰ研が話題として扱われ，FD 出席者から複数の肯定的評価を得た。課題への回答として，令和４年度の取組は概ね満足できるものになったと考えている。教員志望の学生が自身の教育実践力を自ら可能な限り向上させようとする

姿は，学部と教職大学院が共通して求める望ましいイメージであると思われる。P 研の対象者や指導者の拡大を検討するとともに，内容の充実を図りながら取組を持続させ，さらに発展させていくことが今後の課題である。

表１　実施概要

回	実　施　日	テーマ・内容	参加者数 (a)	(a)のうち 学部生	(a) のうち 学卒院生	講師数	講師以外 大学教員 数
1	4 / 25	・自己紹介 ・講話 実務家の大学教員	23	13	10	1	6
2	5 / 9	・講義１ 「願書の書き方」 ・講義２ 「指導案作成のポイント」	25	14	11	2	6
3	5 / 23	・指導案検討	23	13	10		5
4	6 / 6	・模擬授業	17	7	10		5
5	6 / 27	・模擬授業	17	7	10		7
6	7 / 11	・模擬授業	19	10	9		7
7	7 / 25	・講義 「面接と場面指導」 ・模擬授業	21	13	8	1	7
8	7 / 27	・面接練習 ・場面指導練習 ・模擬授業	14	10	4	5	
9	8 / 1	・面接練習 ・場面指導練習 ・模擬授業	15	13	2	6	
10	8 / 3	・面接練習 ・場面指導練習 ・模擬授業	13	10	3	6	
11	8 / 8	・面接練習 ・場面指導練習 ・模擬授業	15	14	1	5	
12	8 / 10	・面接練習 ・場面指導練習 ・模擬授業	17	13	4	6	
13	10 / 24	・講義 「学校現場に出るまでに 準備すること」	16	6	10	3	1
14	11 / 7	・講義 「学級開きの仕方 ・学級目標の作り方」	12	8	4	1	4
15	11 / 21	・講義 「授業の技術」	14	6	8	2	
16	12 / 5	・講義 「UDLの授業づくり」	14	6	8	1	4
17	12 / 12	・講義 「授業におけるICT」	14	8	6	1	3
18	12 / 19	・激励 大学教員	12	4	8	8	
		合計	301	175	126	48	55
		平均	16.7	9.7	7.0	–	–
		標準偏差	3.8	3.2	3.1	–	–